

R E P O R T 2011

地域をつなぐ | 1 | 2 | 3 |
| 4 | 5 |



一榊庵 茶室

懐かしさが魅力の街並み散歩

一松庵界限と一榊庵を訪ねて

講師：杉並たてももの応援団 大嶋信道

■ 5/28 (土) 16:00 ~ 18:00 ■ まち歩き + 一榊庵

地域をつなぐ

2011年度の土曜学校の通年テーマを「地域をつなぐ」とし、様々な他団体と共催のかたちで講座を企画しました。地域をつなぐことは、人をつなぎ、場所をつなぎ、時間をつなぎ、心をつなぐことでもあります。この年、3月には東日本大震災が発生。凶らずも、多くの人たちが「地域をつなぐ」ことの重要性に気付くことになりました。

企画は立てたものの、その未曾有の災害から2ヶ月半しか経っていないこの時期に、果たしてまち歩きに人が集まるのか、少々不安でした。しかし、当日小雨がぱらつく中、予想以上に多くの方々にご参加頂きました。

西荻駅の喧噪の中で受付を済ませ、杉並たてももの応援団のメンバーに、西荻駅周辺の「昭和の看板建築」などを解説してもらいながら、商店街を南へ。普段、意外とお店を建築として見ていないものです。これほどレトロな建物が残っていることは驚きでした。

昭和初期の住宅 「一榊庵」

そして、最終目的地である、登録有形文化財の「一榊



大嶋氏の説明に耳を傾ける参加者

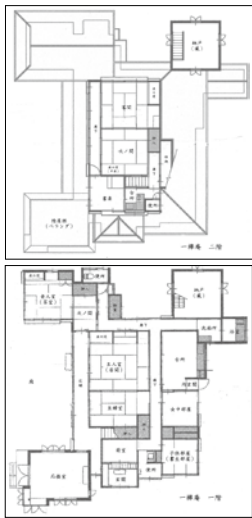
庵」に到着。

一櫛庵は昭和8年建築の2階建ての和風住宅です。2010年1月には登録有形文化財に指定されています。門の傍にある大きな櫛の木と、家を建てた（現在の庵主にとっての）祖父の名から一字を取り、一櫛庵（いっきよあん）と名づけたそうです。

この時期の住宅の特徴である洋風の応接間が、主屋から少し張り出した形で庭を囲んでいます。洋間にはマントルピースがあり、天井は漆喰装飾でセンターサークルが描かれ、優雅な意匠となっています。庭に面しては5間の長さの広縁があり、広間を通り過ぎた奥には、6畳の茶室が応接間と対比するように配置されています。北側は裏廊下を挟んで、台所や納戸、女中部屋となっています。

2階には二間続きの客間と主の書斎があります。以前は一階の洋間の上部に当たる部分は、ルーフバルコニーとして使われていたそうです。

この住宅は、当時の主が宮大工に依頼して建てさせたということで、しっかりした架構に加え、随所に遊び心のある意匠をみることができます。欄間や障子などの緻密な職人技には目を見張るものがありました。3箇所ある床の間は、それぞれに趣向を凝らした個性的なつくりになっています。また、ダイヤや霜模様のガラスが多用されており、当時の流行が忍ばれます。大切に手をいれながら住み継がれている、日本の家屋の趣がそこにはありました。



一櫛庵 平面図

2010年に登録有形文化財の指定を受けてからは、普段は非公開ですが、寄席や教室、展覧会など不定期のイベントの際には内部まで見学することができます。

杉並たてももの応援団の活動

大嶋信道・談

杉並たてももの応援団は、区民の視線で町並みや魅力的な建築を守り、将来につなげることを目的として1999年に設立されました。活動の中心は保存のための調査、記録などが主で、一櫛庵では国の登録有形文化財に申請する事務手続き代行を行い、その後も維持管理をサポートしています。

荻窪の北、現在レストランとして営業されている「ビストロ・オヂ」は、大正13年築の洋風建築です。この建物を登録文化財申請したのが最初の活動です。

2004年には、今は亡き、魅力ある建物の写真をメンバーでもちより写真展を開催しました。こちらは、上荻久保邸です。ヨーロッパと日本の民家が融和したような魅力的なデザインです。

浜田山三井グラウンドのクラブハウスは、昭和13年に久米権久郎によって設計された日本のモダニズム建築です。たてももの応援団としては保存要望書を提出しました。

景観的立場から一部保存を提案もしました。それらの活動を続けるうちに、区から調査依頼が来るようになりました。

杉並たてももの応援団

1999年に発足した市民団体。まち歩きや歴史的建物の見学会等を主催。また、近代建築や町並みの調査や登録文化財申請の協力、その他維持保全や活用のサポートを行っている。

これは、元杉並りサイクルセンター（阿佐ヶ谷）ですが、応援団から調査させてほしいと申し出ました。ギリシャ風の柱頭が特徴の建物です。保育園に建替えるにあたって、ポーチ部分を部分保存できないかと要望をだしたところ、全体工事費の3%をその復元にあてることになり、この玄関部分の意匠は残ったという例です。

その他、戦前の残したい建物の全貌を把握する活動もしています。これは杉並区から予算が付きましましたので、区内の近代建築の調査を始めました。良い建築を残し活用するためには、まずは情報を整理しておく必要があるわけですが、最近は個人情報保護から行政はそこに入り込めないようなので、逆に民間なのでできる活動といえます。2004年にスタートし、手書き台帳と写真で記録し、パソコンにデータ入力するという作業で、現在300件程のデータが集まっています。

もともとは、東海大の稲葉研究室が1987年に調査しており、その際に対象となった建物は633件でした。その後我々が追跡調査したところ、そのうちの3割しか残存していませんでした。また、稲葉研究室の調査からもれていたものもあり、その中にはこの一櫛庵も含まれます。

保存活用の相談を受けた場合には、その後の補修メンテナンスに関わらせてほしいということを条件に調査をさせて頂いています。

文化庁の方を呼んで、登録有形文化財の勉強会なども企画しました。

その他、これは皆さんご存知でしょう。宮崎駿のトトロの家といわれた住宅です。区が保存して公園として整備するために買取ったのですが、不運にも不審火で焼失してしまいました。

しかし、まだたてももの応援団も把握していない住宅もあります。例えば昭和史の舞台となった近衛文磨の自邸、てきがいそう荻外荘などは、全く調査に入っておりません。

この写真は、ここ一櫛庵の茶室の、ビフォー&アフターです。オリジナルを尊重して化粧直しをサポートしました。また、展覧会の企画運営なども行っています。2階を展覧会場としての書展や薩摩びわのイベントなども開催しました。

その他、お掃除会といって、そうじイベントもやりました。最後は、庭の落ち葉での焼き芋パーティを開きました。

その他、現在も文化財登録のお手伝いを何件もしています。

こちらは、馬橋の建物調査の様子です。最近の写真も応援団メンバーのプロカメラマンが撮影していて、広報等にも使えるものを常に用意するようにしています。

その他、実測図やスケッチをおこしたりして、これらの建物が杉並の景観に残るようサポートをしています。

（林 美樹）



今も残る看板建築



荻窪駅南口の商店街



JIAメンバーと若い建築家を前に古民家の襖に即興スケッチ。



葉山一色の家上棟風景

ひとつの住宅ができるまで —スカイハウスと木組みの家に見る

建築家と職人の仕事—

講師：遠藤勝勸 都倉孝治

■ 7/23 (土) 18:00 ~ 20:00 ■ あんさんぶる荻窪 4F 教室

建築家×職人

2011年度の第2回土曜学校は、一軒の家ができるまでの建築家と職人のコラボレーションをテーマに企画しました。

JIA 杉並地域会の遠藤勝勸さんは、日本のメタボリズム建築の巨匠のひとりである菊竹清訓さんの設計事務所に40年勤務した、名実共に菊竹事務所の番頭さんです。また遠藤さんは実測の達人で、その味のある実測図は書籍としても出版されています。(『見る測る建築』TOTO出版、『スケッチで学ぶ名ディテール』日経アーキテクチャ) また、遠藤さんのお手製の手帳も、関係者の間ではたいへん有名で、会議や打ち合せの予定や記録、仕事のスケジュールなどが一目で分かる素晴らしいものです。それらもすべて、叩き上げで修行されてきた遠藤さんが、自ら試行錯誤をしながら築かれた技とも言えます。

この日は、菊竹さんの自邸であり、昭和の名建築と言われる「スカイハウス」がどのようにつくられ、その後生活に合わせて増改築されて行った様子についてお話頂



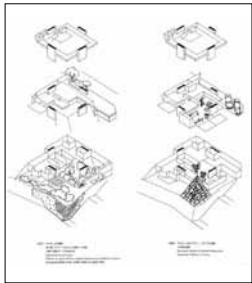
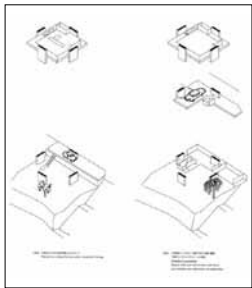
遠藤勝勸 ■ えんどうしょうかん
1934年東京生まれ。早稲田大学工業高等学校卒業後、菊竹清訓建築事務所入所。「東光園」「烏根県立図書館」「久留米市庁舎」など数百にのぼる作品を担当。94年に同事務所退所後、遠藤勝勸建築設計室を設立、現在に至る。著書に『見る測る建築』TOTO出版、『スケッチで学ぶ名ディテール』日経アーキテクチャなどがある。



都倉孝治 ■ とくらたかはる
1957年東京の大工の家に生まれる。数寄屋・茶室などを手がける棟梁の元で修行。独立してからも伝統的技法などを修練し、現下手刻み、伝統的木組みにこだわった木造を手がけている。



「スカイハウス」を語る遠藤氏



スカイハウスの変遷

きました。

スカイハウスの変遷をたどる

建築の歴史を学んだ人は、おそらくスカイハウスの外観写真を一度は目にされたことがあるでしょう。遠藤さんは、1958年の竣工時に雑誌に掲載された写真から話を始められました。当時は周囲に高い建築物がありませんでしたので、斜面からピロティで持ち上げられた正方形平面の緩い方丈屋根のかかったコンクリートの住宅は、スカイハウスの名にふさわしく際立っていました。また当時の菊竹さんの思想であった、「災害に耐え、自由な間取り、取り替え可能な設備、ライフスタイルの変化に対応できること」などを明解に具現化したものであったことがわかります。

夫婦2人の生活のための空間ですから、内部は家具によって仕切られているだけで、様々な間取りにする変化の可能性を秘めています。キッチンや水廻りはユニット化されており、自由な場所に取り付けられるように考えられています。菊竹さんはこれを「ムーブネット」と名付けました。

外周をぐるりと囲んだ外廊下は、外側に格子戸、内側にはスチールのガラス戸と障子といった建具で閉じられるようになっており、写真とディテール図からその綿密で練り尽くされたデザインがうかがわれます。

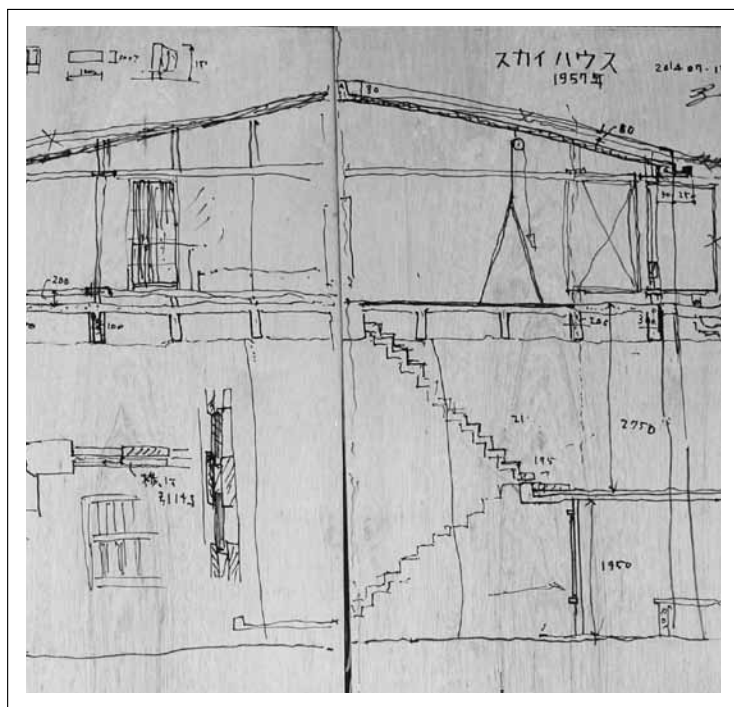
その後、菊竹さんに子どもが生まれ、ピロティにつり下げる形で「子ども室ムーブネット」を増築します。実

際のところは、このムーブネットは子どもたちには不評だったとか。

1977年にはピロティをガラスで囲い、サンルームを増築しました。遠藤さんはその工事の担当で、ガラスのカーテンウォールのディテールには大変苦労されたようです。緑が鬱蒼とした魅力的なガラスの空間でしたが、実際には湿気がひどく、1985年には、その場所をファミリールームに改修しています。

10m×10mのワンルームからスタートしたスカイハウスは、子どもたちの成長とともに、「メタボリズム建築」そのままに、大きく姿を変えたことがわかります。その他、菊竹事務所時代に遠藤さんが担当したいくつかの住宅も紹介していただき、施主と建築家の強い信頼関係、建築家と職人との原寸大での駆け引きから、後世に残る名建築が誕生したことがよくわかりました。その実体験からくるお話は興味深く、時が経つのがあっという間でした。

また、手元資料として、遠藤さんが担当された住宅物件の打ち合せ記録が配布されましたが、施主の発言、それにたいしての設計者の対応などが時系列できっちりと書き込まれたもので、われわれ設計に携わるものにとって、(あるいはどんな仕事に置いても同様かもしれませんが)依頼主や施工者と真摯に向き合い、議論し、そしてまた後で振り返ることが出来るように、その記録を残すということの大切さを教えて頂きました。遠藤さんは建築家であると同時に、職人的な気質ももっている方ではない



襖に描いた遠藤氏の「スカイハウス」スケッチ

かと思います。ですから、もの作りの現場で、職人たちとも膝を交えて、粘り強くやり取りをされたことと思います。それは、出来上がった作品のディテールからも感じとることができました。

大工職人がつくる家作り

後半は、大工棟梁の都倉孝治さんに、その仕事を紹介していただきました。都倉さんは、私の現場を多く担当してくれている、伝統構法を得意とする大工棟梁です。いつも手刻みで、出来る限り金物を使わない、昔ながらの継手仕口で組上げてくれています。



実物大のサンプルで仕口組を検討する

この日は1階がRC、2階が小舞土壁で、4間×4間の空間内部に柱をたてずに小屋組とした住宅を写真で紹介いたしました。この葉山一色の家は、壁2面ずつが勾配の違う登り梁となっているため、垂木の断面が菱形になるという、大工泣かせの大変難しい架構でした。木造を得意とする若手の構造家である山田憲明さんとの協同でこの小屋組が実現しました。その他、左官職人である江原さんからの提案で出来上がった群青の漆喰で塗られたキッチンカウンターや、葉山の砂浜をイメージした玄関の洗い出しなども紹介致しました。このように、この家は伝統的な職人技を現代的な空間と意匠に活かすことをテーマにしています。

また、棟梁が継手仕口の模型を披露してくれました。パズルの様で、どういう仕組みになっているのが、一見したのではわかりません。しかし力の伝わり方、組み方の手順、抜けにくさなど考え尽くされて現代に伝わる伝統的仕口や継手の妙に、会場の人たちは思わず立ち上がり、「オー！」という歓声があがりました。

建築はその場所場所に敵した材料で、気候風土、そして時代の求めるものによって、また依頼主や設計者、作り手の創意によってつくられる、唯一無二の造形作品であり、かつ実用的な空間でもあります。遠藤さんが語る建築家としてのもの作り精神に心を打たれ、大工棟梁が継承しようとしている技術の奥深さを再認識し、忘れてはならない建築の本質を垣間みることができたように思います。

(林 美樹)



継手仕口の実物を用いて説明する都倉氏



アメリカ連邦建築博物館のファミリープログラム 撮影／筆者



阿佐ヶ谷・神明宮での東日本大震災鎮魂のキャンドル「笑顔の輪」(区立杉並第一小学校ほか)



↑↓杉並区立松溪中学校の立て替え前のペイント・イベント (写真提供：NPO T.F.F)



建築と子どもたち —創造力を育てる環境教育の現場—

講師：稲葉武司 土屋 稔

■ 9/17 (土) 18:00 ~ 20:00 ■ あんさんぶる荻窪 4F 教室

これまでも JIA 杉並・土曜学校では地域の小学校の「エコスクール化」に向けて学校教育の現場を取り上げてきました。今回は、表題のように「創造力を育む教育」の現場を訪ねる企画です。講師に建築家・稲葉武司さん、グラフィックデザイナー・土谷稔さんをお招きし、国際的な実情と地域での実践的な活動に学ぶこととしました。

子どものための建築教育

稲葉武司

フランスでは幼稚園、ドイツやオーストラリア、ノルウェー、スコットランドなどでは小学校で哲学を教えているそうです。ならば、小学校に「建築の時間」があってもよいのではないかと探したところ、フィンランドの小学校には「建築の時間」がありました。最近では、世界のあちこちでこれと似たような時間が初等・中等教育におかれています。それがロシアでは 27 年もの歴史があるというのです。子どもたちに建築を教える理由は様々です。

勿論、共通点もあります。それらをざっと眺めて、自分なりの切り口で「子どもたちに建築を教える理由」を想定してみました。哲学は人が人生を豊かに生きるため



稲葉武司 ■ いなばたけし
1938 年中国生まれ。建築家。
東京芸術大学、ワシントン州立大学で建築を学ぶ。東京芸術大学講師、共立女子大学助教授をへて教授となる (1994 年)。1991 年より「建築と子供たちネットワーク・ジャパン代表幹事日本建築学会の建築教育委員として「建築と子ども」をテーマに活動している。
著書：「外国のなかの日本人」
訳書：「形の合成に関するノート」

C. アレクサンダー
共訳 稲葉武司 押野見邦英
「巨匠ミースの遺産」
共訳 山本学治 稲葉武司
「機能主義理論の系譜」
E.R. デ・ザーコ
共訳 山本学治 稲葉武司



小石や木の枝で遊ぶエチオピアの子どもたち (撮影/ルドフスキー)

の「考える力」を育むのだそうです。建築はどのような力を育てるのでしょうか。

建築と子どもたちをとりまく世界の状況

「建築家なしの建築」の著者として知られるバーナード・ルドフスキーは、学校で教えられることもなく、機械仕掛けの遊具や玩具も知らない、エチオピアやコンゴの子どもたちが小石や小枝などで小屋や家畜囲いを作って遊ぶ様子を報告している。積み木や砂場で家や城を作る子どもの遊びには、歴史や地域を越えた普遍性があるのだが、遊びに見られるこのような人間の建造能力は本能とは言えない。小鳥でも獣でも成長すると生活のために巣をつくることができるが、人間は巣作りに教育を必要とする。学校で子ども達に建築を教えるという考えは、環境問題が教育に主要な位置をしめるようになったことと無関係ではない。環境問題の要点が自然世界と人間が建造する世界の調和を持続することだと理解されてくると、人間が建造する環境 Built Environment もまた教育上の課題であることがはっきりしてきたからである。

こうした背景のもとに 1999 年の UIA 北京大会では、建造環境の教育に建築家が貢献するための作業部会「Architecture and Children」の設立が決定され、その活動は UIA Built Environment Education Program と名づけられた。JIA は設立に集まった 19 ケ国建築家団体の一つである。当時わが国では、OECD の内部文書で経済大国らしからぬ住宅事情を「ウサギ小屋」と揶揄され、

子どもの住教育の取り組みに関心が集まっていた。また、各地で建築関係者による様々なワークショップが試みられるようになっていた。

小中学校でも建築や都市、すなわち建造環境 Built Environment の教育が必要であるという考えは、ヨーロッパ諸国では当然視されるようになってきている。ヨーロッパには、国の建築についての理念である建築基本法 National Architectural Policy を制定している国が多い。そのような国が集まり、European Forum for Architectural Policy を定期的に関き、ヨーロッパの建築文化を共通財産として維持すること、常に建築の質を向上させること、そのための教育などについて議論をしている。子どもの建造環境学習には国それぞれの教育事情が反映されるが、どの国にとっても学校の時間割が満杯であること、教員養成の課程に建築や都市を盛り込む難しさなどの課題は共通している。

すでに世界の総人口の半数以上は都市に住んでいて、それが地球の表面積の 30% しかない陸地で急速に増え続けている事実を考えると、地球規模で人間の巣作りに必要な教育のあり方を議論する Global Forum for Architectural Policy が招集される日は近いかも知れない。今気がかりなことは、わが国では建築基本法は未だに準備段階で、英語名が Architectural Policy ではなく Building Fundamental Law であること、Built Environment という言葉が今もって市民権を得ていないことである。

Architecture and Children-Learning by Design-

AIA (米国建築家協会) の支援によって子どもたちの建築教育のために編集された指導書。アン・テラー(文)、ジョージ・プラストス(絵)、ニヴァ・ハーデン(編)、稲葉武司(訳)本書は、米国建築家協会の環境教育プログラムの一環として作成され、A2 版 17 枚のシートに集約された優れた建築概論といえる。建築の総合性は、子どもたちが学ぶ全ての教科と関連しており、同時に創造力を育てるためのツールとして役立つという理念のもとに編集されている。

JIA (日本建築家協会) ゴールデンキューブ賞

本賞は、子どもを対象に建築やまちづくりへの関心を高めるために設けられた。UIA (国際建築家連合) の「UIA Architecture & Children Golden Cubes Awards」とも関連しており、日本からの推薦作品の選考を兼ねている。



土屋 稔 ■つちやみのる
グラフィックデザイナー。1965年神戸生まれ。大分県立芸術緑丘高校・美術科、大阪芸術大学デザイン科卒業。大阪・東京でグラフィックデザイナー、アートディレクターとしての経験を積む。現在は、杉並区に在住し、地域の小・中・高校の美術講師や紙芝居制作、口演活動など地域を拠点にした活動を続けている。

アートを通して地域と学校を支援する

土谷 稔

グラフィックデザインを学び、社会に出てデザイナーとして活動してきましたが、いまはその活動に加えて、阿佐ヶ谷にあるNPO法人 Tuning for the Future (TFF) に協力し、アートを通して地域を活性化し、学校での創造力育成のための学習を支援しています。

●三原色を使って色の性質を学ぶ -小学1年生の図工の実習-

杉並区立西田小学校1年生の図工の時間の試みです。赤・青・黄の三原色の水彩絵の具を用意し、夫々の色を混ぜ合わせ、どんな色が出来るか各自で体験します。色の組み合わせ、混ぜる量によって微妙に変化する色の性質に目を見張ります。三原色に白、黒が加わるとまた多様な色ができます。そして、自分の好きな色を探します。



区立西田小学校での水彩絵の具入門授業

●商店街をリフレッシュする

商店街のフロントは、シャッター付の構えが多く、閉店時の通りを無味乾燥なものにしています。シャッター通りなどと云われる寂しい商店街ではなおのことです。子どもたちの奔放なアイデアと表現によって、見違えるようなフロントが生まれました。



阿佐ヶ谷駅西側・川端通りを金魚通りにペインティング。地元アーティスト及び子どもたち(写真提供：NPO T.F.F)

●建て替えする校舎を使ったイベント

杉並区立松溪中学校の改築に当り、これまで使っていた校舎の壁を使って、夜光塗料によるアーティストチックなペインティングを行った。夜の鑑賞会で参加者は思わぬ効果にみな目を見張った。



杉並区立松溪中学校イベント(写真提供：NPO T.F.F)

●工事中の公共通路をギャラリーとする

永福町駅の工事現場の通路をギャラリーに替えるイベント。近くの六つの小学校の児童に参加を呼び掛け、通路の壁面に絵をかく作業を行った。出来た作品は好評でした。また、制作プロセスでの児童の協働体験は貴重なものとなりました。

こうした活動を通して、子どもたちに創造の喜びを感得するよう努めています。いまの子どもたちは、お利口さんで無駄なことをしない、早く結果をだしたいといった大人社会の在り様を反映しています。安易にそうした方向に走らぬよう指導しています。また、日本の社会ではアート活動への評価が低く、この面での意識改革が望まれます。

●私の落書きノート

私は小さなノートを何時も携帯しています。100円ショップで買える雑記帳です。そして思い付くことを即座に記入します。私のアイデアの玉手箱といえます。創造的な仕事といっても急に思いつくものではありません。豊かな蓄積があって初めて実現するものと思います。このノートは、私の思考プロセスの記憶であり、このノートを読むことによって過去との対話が可能となります。創造的な仕事をする術の一つとして子どもたちだけでなくすべてのひとにお勧めしたい方法です。IT化の進行は、デザインの領域にも多くの変化を招いています。そうした傾向のなかで、初等教育のなかでも新たな志向と実践が求められています。(林 昭男)



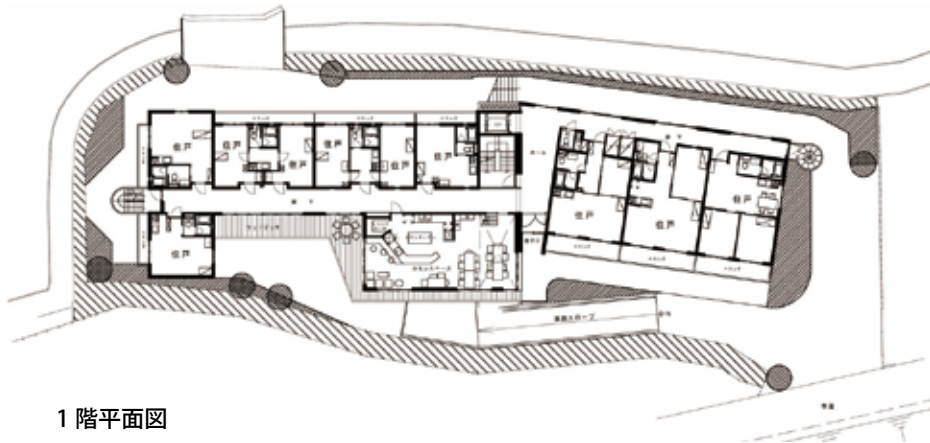
永福町駅立替え工事中通路絵画展(杉並区永福小学校他)



服を着るように身につけている「なんでも帳」



季節の行事も楽しく工夫～手料で賑わうクリスマスパーティ



1階平面図

コレクティブハウス聖蹟 平面図 (基本設計: NPO コレクティブハウジング社+篠田弘子設計室 鞆設計監理: 篠田弘子設計室・鞆)

シェアする暮らしの豊かさとは？

—地域とつながりながら年を重ねるために—

講師：狩野三枝

■ 11/26 (土) 18:30～20:30 ■ あんさんぶる荻窪 4F 教室



狩野三枝 ■ かりのみえ

愛知県名古屋市生まれ。名古屋工業大学 社会開発工学科 (建築専攻) 卒業後、13年間、(有) 大久手計画工房にてユーザー参加の建築設計及び市民参加型まちづくりの現場で活動。1994年～コレクティブハウジングの研究・啓発活動 (ALCC) に取り組み、2001年にNPO法人コレクティブハウジング社設立に参画。現在、NPO法人コレクティブハウジング社理事、コレクティブハウジングコーディネーター。青山学院女子短期大学非常勤講師。共著に「参加のデザイン 道具箱」(世田谷まちづくりセンター)、「コレクティブハウジングで暮らそう」(丸善)、「参加するまちづくり」(OM出版)

コレクティブハウスという「住まい」

都会には、年齢に関わらず、仕事に多くの時間を費やし、地域とのつながりなど全くなく暮らしている働き盛りの人がたくさんいます。また、今までそのような生き方をしてきて、仕事を引退した後、家で持て余す時間をどう使おうかと悩む人も少なくないようです。そのような人が、町内会や地域活動などへ参加する動機をどう持てるのか、また、隣人や地域の人々とつながりをもちたい、何か地域の役に立ちたいと思った場合でも、具体的な行動に結びつけることは難しいのではないのでしょうか。そういったことを逆方向から捉え、目的的でなく、共同によって人が豊かに生きるための仕組みを持つ住まいがコレクティブハウスです。

コレクティブハウスは、日常誰もが生きていくために欠かせない生物的営みとしての自分や家族のための仕事＝「料理する・食べる」「安心して眠る・過ごす環境を作る」「健康的で清潔な環境を保つ」「子育てをする」…を部分的に共同で行うことで、一人一人の生命の基礎となる様々なモノコトを健康的に持続させる住まい・暮らしとも言えます。そうした生物的欲求を基礎としながら

人と何かを分かち合いたいという人間的欲求を満たす動機を共有し、共に暮らす仲間がお互いを尊重しあい、時に楽しく、心豊かに暮らす創造的な仕組みを持つ、最小単位のコミュニティという表現もできます。そのため、コレクティブハウスでは、全ての人が住コミュニティに関わる動機を有し、年齢、性別、家族の有りに無しに関係なく、個人個人の生き方の問題として選択することになります。

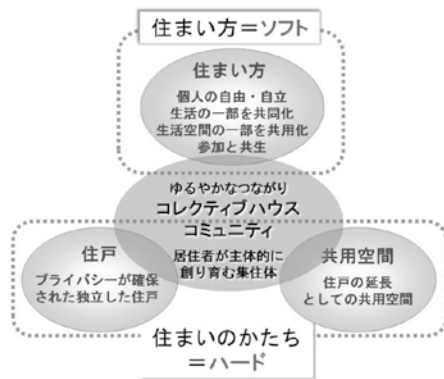
具体的にコレクティブハウス聖蹟を事例として紹介します。コレクティブハウスは、個々に独立した住戸を持ちプライバシーのある暮らしをしつつ、居住者で共有スペースを共有し、共同したいことを自分たちで話し合っ



コモンダイニング～広いスペースは食事だけでなく、個人で仕事をしたり、友人が訪ねてきたり…



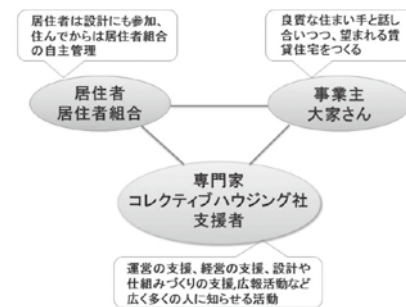
コモンミールのクッキング風景



例えば、コレクティブハウス聖蹟では、月の半分ほど、居住者の持ち回りで共同の夕食づくり（コモンミール）をしています。食べる食べないは自由ですが、誰かのために月に1回ぐらいはつくる役割をしましょうという考え方で運営をしています。その他、掃除やガーデニン

グなども居住者が共同でやっています。こういった、共有している場を使ったり環境を整えたりすることを、一人一人やり方はいろいろあるけれど、居住者全員で淡々とやり続けることによって、誰かが少しずつ日々の暮らしを気遣い、役割を担い、それがバトンタッチされていくことで自然にこの暮らしが快適に回っている。何か問題があれば話し合えばよい、という信頼関係が安心感を生み出し、コミュニティの力ともなっています。

そういったコレクティブハウスという地域に小さく根付いたコミュニティを支えるためには、事業の仕組みが大切です。居住者は居住者組合をつくり自分たちで管理運営をし、コレクティブハウスという住まいを継続させる主体者となります。ですから、ハウスを作るところから参加してプランニングにも関わります。一方、事業主は、そのような責任を持つ良質な居住者と対話をしながら望まれる賃貸住宅を作ります。それを、第三者であるNPOがコーディネートすることで、三者がそれぞれの役割を担うパートナーシップ事業として、住まい手に望まれるより良い住まいが実現すると考えます。(図参照)



庭や屋上菜園の手入れ。収穫がウレシイ



大人は仕事、子どもは映画でくつろぐコモンリビング

コレクティブハウスという住まい・暮らしを選択することは、生き方を選択していることに他なりません。生き方であるからこそ、常に多様性に富み、100人いれば100通りのコレクティブハウスがあって当たり前なのだと考えます。

人とつながることで自分らしく年を重ねられる暮らしとして、地域の中でも空き家を活用したりしてコモンを生み出すなど、ソフト展開の参考にいただければと思います。

「私のこれからの暮らし」を考えるワークショップを終えて

今回は、杉並地域会の企画として「地域をつなぐ」という大テーマがありましたので、こちらからのお話の後に、参加者の皆さんに「私のこれからの暮らし」についてミニワークショップで意見交換していただきました。多様な方々の多様な「これからの暮らし」を垣間見ることができ、たった26名ですが、実に多様な状況とこれからの暮らしへの思いが見て取れます。

●老後1人になったとき、どうしたいかをイメージしてみた。一人暮らしの気ままさと、大家族的な和やかさ、どちらも大事にしていきたい。人のためにもなりたいし、苦手なことはお願いしたい。住処を長く快適な環境に保全するという共通の目的を持てる集合体は、他人でありながら全くの他人とも違う、面白いパートナーシップ。知恵や知識のやりとりも刺激的。さらに、身内とのつか

これからの暮らしをどうしたい?(解答者 26人)	計 (人)	26人 中
<input type="checkbox"/> これからの自由のために	3	12%
<input type="checkbox"/> 一人で食事をしたくない	11	42%
<input type="checkbox"/> 自分自身のための暮らし	8	31%
<input type="checkbox"/> 子どものいる暮らし	4	15%
<input type="checkbox"/> 若者と交われる暮らし	9	35%
<input type="checkbox"/> 刺激のある暮らし	8	31%
<input type="checkbox"/> 家族と共に暮らしたい (両親・子・兄弟など)	5	19%
<input type="checkbox"/> 自分らしく暮らしたい	16	62%
<input type="checkbox"/> パートナーと共に暮らしたい	10	38%
<input type="checkbox"/> 軽やかに暮らしたい	11	42%
<input type="checkbox"/> ご近所どうし仲良く暮らしたい	10	38%
<input type="checkbox"/> 気のあった友人と暮らしたい	6	23%
<input type="checkbox"/> もう、開放されたい	0	0%
<input type="checkbox"/> 多様な人と交わって暮らしたい	11	42%
<input type="checkbox"/> できる限り自立して暮らしたい	14	54%
<input type="checkbox"/> 終の棲家になる住まいで暮らしたい	2	8%

ず離れずの暮らしにも良いかも。

●地方から20年前に来てほとんど知り合いもない中で、たまたま近所の喫茶店で、多様な職業の人に出会って多くのことを学び楽しく暮らすことができた。しかし、その場がなくなったため、そういった場を求める気持ちが強い。反面、友人が経費有料老人ホームに入り、様々なことが共同だったり自由が来かなかったりするという話を聞き、新しい形の住み方を探すことにつながっている。

●シンプルにきちんとした健康的な暮らしをしたい。便利すぎる生活から一歩離れ、本当に必要なものを大事にして暮らしていく。そのために、昔ながらの生活の知恵、時には新しいアイデアを持った人々と交わっていく暮ら

し。それは密なご近所づきあいでも、シェアをして生活するのでも、形は問わない。

●家族を中心としつつも、自分の世界を広げ、新しい楽しみを発見してシェアできる仲間が周りにいる暮らしをしたい。

●生活は1人でも良いが、多くの人を招いたり情報交換をしてひとりぼっちでない生活をしたい。若い世代とも交流をして、年をとってからでもできるスポーツなどを通じて、また、共に料理をしたり楽しい暮らしを積極的に創り出したい。自分の子どもばかりでなく、親戚の皆と食事したりして、大家族の良さを確認したい。

●ものに振り回されない生活を望んでいる。仕事を通じて刺激を求められたらと思う。

●家族だけに閉じ籠った暮らしではなく、隣人だけでなく、地域にも開かれた暮らし。地域ぐるみの活動や地域の住環境が良くなっていくことの出発点として、居住空間の多様な関係性が広がる暮らしを望む。

●都市部は、田舎のように祭りで地域がまとまりといったことが希薄化している。ある目的をもってサークル活動に参加はするが、住んでいる場所でコミュニティを形成することが大切と思える。

●仕事を離れて山歩きなど好きなグループでのつきあいは楽しかった。多様な人との交流を心がけて暮らしていきたい。暮らしを豊かにするために、近所に友人、知人を増やしたい。気のあった仲間と楽しむ時間、自分自身を見つめる時間もほしい。

●他人の子どもは誰でもかわいい！よその子と、兄弟などの身内の子どもに差はあるものの、大人ばかりの暮らしはつまらない。しかし、結婚せずに暮らしてきたため、身についた身勝手な暮らしは捨てられない。その中間的な暮らしが望まれる。

●子どもの家族と近居したいと思っていたが、若い人の考え方は違い現実はそのとはいかない。子どもたちの迷惑にならないよう、夫婦で自立して自分たちの仲間やコミュニティをつくっていききたい。

●家族、パートナーを大切にしたい暮らしを続けたい。しかし子どもに頼らず自立した自分らしい暮らしをしたい。家事は今まで一切やったことがないので、1人の食事は考えられない。孤独な生活でなく何らか人と交わっていけるように心がけていきたい。

●健康で暮らし続けたい。今の性格や好みを変えないですむ環境にいたい。そうするためには自分で責任を持つ精神が必要。

●元気なうちはよいが、コミュニティを離れず仲間の足手まといにならないで生き続けるのは難しいこと。

(狩野三枝) 担当：篠田弘子



ワークショップをリードする狩野氏

まちづくりの視点 一杉並の10年後の姿一

講師：日端康夫 関口太一

■ 1/17 (土) 18:00 ~ 20:00 ■ あんさんぶる荻窪 4F 教室

はじめに

平成 22 年 (2010 年) 12 月、杉並区役所で「杉並区基本構想策定委員会・まちづくり・産業・環境部会」が開かれた。区事務局より、「これからの十年後を見通した『杉並区基本構想 (10 年ビジョン)』を作成したい。まちづくり等について審議をお願いします。」との話があった。区では、平成 12 年 (2002 年) 9 月に作成した「杉並区 21 世紀ビジョン」を有している。だが、10 年を経過した現在、夢のようなビジョンよりも現実味あるまちづくりビジョンを盛り込みたいとの主旨であった。こうして、この日から、基本構想を巡る区役所、議員、市民、専門家からなる熱い議論がはじまったのである。日端は当部会の座長を、関口は専門調査員との立場で参加した。

基本構想作成の最中、日端や関口が関わった議論を土曜学校で紹介する機会を得た。その時に紹介した、主に「まちづくり」部会の内容を本稿に改めて再現することにした。常日頃、杉並区をどうすればよいか…との土曜学校関係の皆さんの論議に、基本構想に携わった者の立場から一味のスパイスを提供したい。



日端康夫 ■ ひばたやすお
1943 年旧満州鞍山生まれ、東京大学工学部卒業。専攻は都市計画。工学博士。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授。主な著書に『ミクロの都市計画と土地利用』『アメリカの都市再開発』『ヨーロッパの都市再開発』(いずれも学芸出版社)、『明日の都市づくり』(慶應義塾大学出版会)、『都市計画の世界史』(講談社現代新書)などがある。



関口太一 ■ せきぐちたいち
1973 年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。建築設計事務所や造園計画事務所を経て、1979 年 (株) 都市計画設計研究所入社、現在代表取締役。東京都景観審議会計画部会委員、同建築審査会専門委員を歴任、杉並区都市計画審議会委員。



高井戸公園・周辺まちづくり

1. 基本構想（まちづくりサイドから）がねらったこと

「基本構想」とは、今後 10 年間の杉並区行政に関わる総合的な内容をもつ構想である。構想策定後は、「総合計画（10年プラン）」、「実行計画（3年プログラム）」へと具体的な施策への展開が予定されている。こうして、区行政の柱となり、次につながる骨太の方向性を示すことが「基本構想」の役割である。

部会の日端座長は、この基本構想の役割を踏まえて、構想策定のねらいを次のように捉えていた。一つは、バブル崩壊以来、社会の経済活動全般において、いまだに「空白期」であり、この「空白期」から弾みをつける動きを示すこと。二つに、まさに審議のただ中に生じた東日本大震災からどのように杉並の防災として応えるかを示すこと。三つ目は、杉並区は住宅都市であるが、高齢化・少子化、そして人口減少時代を迎え、今後も引き続き住み続けられる都市とする為に何をすべきか…の三点が論点であると考えた。

2. 住宅都市・杉並の将来

杉並区は、土地利用に占める住宅用途割合が極めて高い。区内の建物棟数の 92.5%、床面積比で 90.5%（いずれも平成 22 年度）が住宅系で占められている。まさに区内建物のほとんどが「住宅」なのである。しかし、近年の、高齢化・高齢単身世帯の増加や少子化の傾向に伴い、空き家の発生、教育環境・コミュニティの維持不安、防犯・防災の担い手不足、駅前など商店街の疲弊な

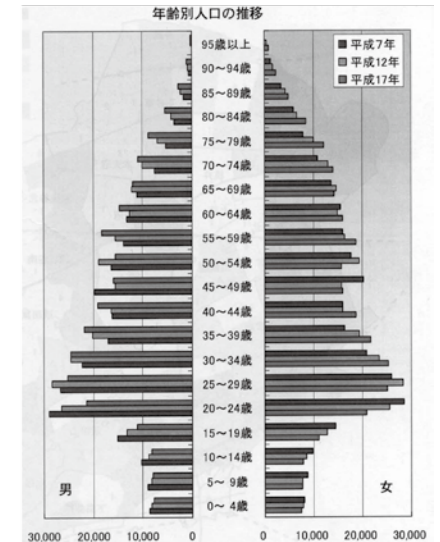
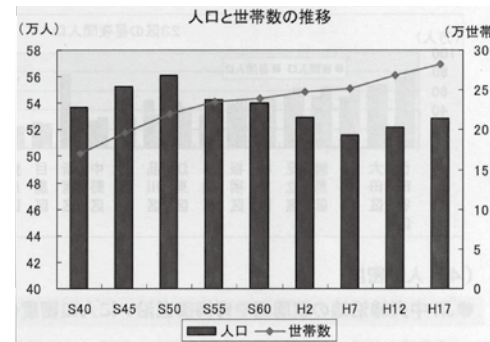
ど、新たな住環境の問題が発生している。

杉並区将来人口予測（2035 年）のシミュレーションでみると、2010 年人口 54 万人が、20 年後の 2035 年は約 53.5 万人とほぼ横ばいで推移し、一見杉並は変わらないかも…の印象を受ける。しかし、その中身をみると、つぎのように大きく変わっているのである。

第一に 15 歳以下の子供達は、もっと減少する（2010 年 5 万が 2035 年 3.5 万）。少子化で子供を産む世帯数が増えるからである（その分高齢は増える）。

第二に、特に荻窪・阿佐ヶ谷の、杉並区の中心部エリアで人口が減る。駅前商業地を支える人口減少による中心部の空洞化である。第三に住宅都市の特徴である戸建て住宅群から集合住宅群に変わっていく。住宅地の街並み風景が変わるのである。

杉並の人口・世帯・財政の趨勢



さらに、現在の区財政を經常収支比率（財政のうち人件費、扶助費、公債費などの「固定費」が財政に占める割合で、80%を超えると財政の弾力性を失う…といわれる指標）をみると、平成21年から平成24年までの各年度で、83.0、84.0、82.7、82.8と80%超えの横ばいそのまま改善されていない。つまり、現状を維持することで精一杯の財政構造になっており、新たな投資ができる財政状況にはないのである。

3. それでも明るい未来を描きたい

悲観的なデータを出したが、基本構想をあまり自虐的にすべきではない。そうした思いで、これまでの「空白期」を超えて弾みをつけ、区民に希望を抱かせる…内容を盛り込みたいと、次の三点を重視したい。

第一に、杉並区の都市構造をもっと明確にすべきである。そのために、杉並の中心核である「荻窪の創生」を図ること。中央線を境に南北の分断状況を改善し、駅を中心にショッピングや憩い、ゆしみなどで南北を行き来する歩行者中心の回遊性ある駅前にしていくことである。これは単に荻窪に止まらない。区内の井の頭線、京王線、地下鉄などにミニ駅前商店街がある。これらをもにぎわいをもたらす「多心」型の都市として育てていくことも背景として盛り込んでいる。

第二に、そのためには、これらを支える住宅地も変える。今や住宅は、単に寝て食事してというだけの場所ではない。若い人、主婦、リタイア層など含め、在宅で仕

事ができる情報ネットワーク社会が出来あがっている。そのような基盤が「アニメ」や「IT情報産業」などの知識産業を産み出している。まさに新時代を担う産業が住宅環境から産まれてくると考えると、住宅都市の姿も違って見えてくる。

第三に、既に「実験」が成功した「座・高円寺」の取り組みに見られる芸術・文化という都市機能の可能性である。劇場を担う人たちが商店街で、商店街で働く人たちが訪れる人たちが劇場を…と相互に支援し、まちににぎわいをもたらす「実験」がよい感じで成功した。これらは、これまで「ハード」中心の考えだけでは生まれない要素がある。つまり、劇場に関わる人たちが地元で働き、情報を交換、発信し、交流を促進する。まさに芸術・文化という「ソフト」でまちづくりを担ってきたのである。ハードとしての「公共施設」は、そのキッカケであり、これからの公共施設は「住宅だけの都市」を「クリエイティブ・シティ」に変える起動装置になるのである。

4. 行政側の取り組みと区民の責任

以上、基本構想がらみのポイントについて紹介したが、もうひとつ重要な課題があることを指摘しておきたい。杉並区は、木造密集市街地という大きな整備課題を抱えている。2011年3月11日の大地震で、区内は帰宅困難者で溢れかえったことは忘れがたい。もし、次に生じた大災害時に、杉並の木密地域が、歩いて帰ろうとする帰宅困難者の行く手を阻むような火災の壁をつくってし

まったら…と思うと、行政主体の責任は重大だ。このため、都と区による木密事業の進展が期待されている。

ここで専門家に考えてもらいたい。木密地域の解消は行政だけでできることではないし、住民だけではもちろん無理だ。さらに、行政が行うことと区民が望むことがミスマッチになっていないだろうか？

図をみると、行政仕事の評価と区民要望との違いが明らかになってくる。区民要望の順位は、災害対策、高齢者対策、子育て、道路整備、商店街振興の順である。区民は重要性を分かっている。一方、行政側が行った施策に対する評価は、みどりと景観に配慮したまちづくり、自転車駐輪場、子育て、リサイクル、居住環境整備である。順位が一致しているのは子育てのみであるが、行政と区民要望はほぼ相関している。しかし、他の木密市街地整備など、事業が困難なものには成果があがっていないから評価されないのであろう。こういう場面に専門家である建築家や再開発プランナーなどが関わる余地や役割はないのだろうか？

事業進展が見られないのは予算不足や住民合意形成に手こずるからで、そこには区益・公益を優先することと住民の個益とが衝突している様子が見える気がする。専門家は各地区や地域にとって何が有益かを示す役割を担っていると思う。困難な状況がどちらの立場にたっても生ずるとすれば、その打開策を専門家が提案し少しでも前に進める工夫をすべきであると考えたい。

(関口太一) 担当：河野 進

